西脇順三郎におけるワイルド

伊　藤　　勲
（名古屋自由学院短大助教授）

文学上，順三郎はペイターを師としたが，反転したペイター芸術を彼に教えたのは，ワイルドだった。ワイルド芸術はペイターの芸術論を極端に推し進めていったところにある。即ち非人間化であり，アンチセンチメンタリズムであり，即物的な物質主義である。この方法によってワイルドは社会の通俗性に対する痛烈な諷刺を含んだ，ペイターとはまた別様の唯美的芸術を発展させたが，彼の逆説的展開の手法は，順三郎にとって彼のモダニズムの展開に少なからぬ力となった。感情の吐露を嫌悪する順三郎にとって，ワイルドのこの主知主義が彼の意向に叶った形式を生み出すのに有用なものに思われたことは，想像するに難くない。ワイルドの非人間化は，ペイターのヒューマニズムを極端に推し進めて行ったところに出現するひとつの逆説であるが，その第一の特徴が物質化だったのである。

ワイルドの物質化は内容より形態を優先し，判断の停止によって出来る限り意味と感情を隠すことによってなされている。表現対象は思想・感情というより，寧ろそれらを反映した形態そのものだった。内容は一種の言葉遊びとなり，表現された思想・感情は虚無に還元される。ワイルドは自己を形態に託し，そこにリアリティを認めていた。判断の停止によって表現対象が特殊な繋累から解除されても，形態だけは自己の最終的な拠り所であり，それでいて主観性を脱却して純粋な形で立ち現れる。それが芸術における虚構性である。ここにおいて自己は他者となる。自己でありながら他者であるという仮面としての芸術が実現される。虚構であると同時に現実であるという境界性を本質とする仮面は，物質主義を仲立ちとしながら判断の停止によってもたらされた芸術形態であった。

一方，順三郎は人間の存在の根底にあり，人の意識のかなたにある何ものかの幻影のゆらめきを，人類共通の感覚を介することによって感受し，嘱目の事物の上に反映させようとした。その幻影のゆらめき即ち人類の魂のたゆたいこそ，順三郎にとって詩であり現実であった。この詩的現実の虚構性ゆえに順三郎はリアリズムのもつ息苦しさ，自然の模倣に由来する卑俗性を脱して軽みに達した。物質化を通して却って芸術に抽象性を付与しえたことは，ワイルドにも言えることであった。彼は内容の無意味化と装飾性の強調，模倣の拒否などを通して，芸術の霊性化を図った。「幻影は最高の現実」と言った順三郎と，「芸術を最高の現実として扱った」ワイルドとの間に，対象の取り扱いにおいてどれほどの逕庭があるだろうか。両者とも物質主義によって却ってそれに伴う卑俗性を排し，表現の霊性を高めることに貢献した。

この両者の虚実の反転を支える物質主義の展開の仕方に違いがあるのも，また事実である。ワイルドの物質主義は，「自然を人間の外側にある現象の集積と見做」したところに立てられている。宇宙を人間をもその一部とする有機体と見ないで，自我から切断された無機的な物質と見做したのである。これに対して順三郎の物質主義は「詩はどう人生を考えないふりをするかということである」という彼の根幹的な詩論を支えているものであり，現実の部分的な破壊によって新鮮に意識された有機体としての自然に自我を融合同化して無に帰せしめる手立てであった。ワイルドの芸術は彼の時代や社会との緊張関係を孕みながら，飽くまで自我を中心に据えて，自然を対象化し自己との有機的関連性をもたぬ単なる物質と見做したところに築かれている。しかしこのことがまた，ワイルドのみならず西洋ヒューマニズムの限界でもあった。自我は強めれば強めるほど見ている対象は姿を隠し，あるがままの全体像を見せなくなる。世界は自分の態度次第でその姿を変える変幻自在の鏡であることは，『ドリアン・グレイ』の中でも示されているとおりである。エゴセントリックな物質主義的な社会と人生の虚妄性を衝き，それを呵々大笑して笑い飛ばすのに，ワイルドほどの逆説的な芸術もないが，また彼自身がその逆説から逃れられないでいる。

これに対して順三郎の場合，外界は自我と断絶した対象としてあるのではなく，自我との有機的な連続性の中にあるという認識から，自我を対象の中に同化した。彼はものの本質を関係性即ち空として捉え，自我を去って新しい関係の中にそれを反映させた。こうして順三郎は，自我の固執によって世界を狭めたり歪めたりすることなく，囚われない観察と判断が可能となることを示唆している。ワイルドが物質主義と自我の主張によって，現実の虚妄性を再認識させてくれたとすれば，順三郎は物質主義を通して自我滅却を図ることによって，現実に潜む虚妄から脱却する術を暗示していると言える。